

海外に子ども用車椅子を送る会

インドネシア中部ジャワ州スラカルタ市（通称ソロ市）における
引渡し式ならび個別家庭訪問に参加して

期間： 2016年4月30日―5月6日

秋子（あきね）孝男

本年2月の定例会より本会活動に参加させていただいている身であり、当会の活動全体像の理解も不十分ではありますが、標題現地活動に参加する機会をいただきましたことに、まず深くお礼申し上げます。

この間の体験はアジアでの私の現役勤務中に会社の名の下に参画、参加した社会貢献活動、洪水被災地支援活動などとは全く次元を異にするものでした。車椅子を喜んでくれる子どもと家族、行政の支援活動の末端だがほぼ無給のソーシャルワーカー、そこに繋いでくれる肢体不自由者支援を活動目的とする現地窓口のNGOメンバーとの活動交流は印象深く、得難い体験でした。

実感したのは、当会から届く子ども用車椅子は土間のムシロ、母親や家族の抱っこしか知らなかった子どもが、家の中、戸外へ車椅子を使用し移動する介助シーンの大きな変化をもたらし、それぞれの立場の人たちにも達成感をもたらすということでした。彼女が推薦した子どもが、引渡し式の中でスラカルタ市長から車椅子調整を受けるシーンを報じる引渡し式新聞記事を手にし、私の宝物にしますとってくれたソーシャルワーカーに心打たれました。彼女は前日朝5時には出発し、家族と子どもを連れ2時間以上の山道を移動し、車椅子を受け取りにスラカルタ市に来てくれた方で、市街中心の新聞を見る機会も少ないそうです。

今回はインドネシアのスラカルタ市、現地側NGO団体CBR-DTCを通しての活動体験でした。これまで現地国側で大きく異なる諸事情、受け入れ団体の選定などを乗り越え、現地の子どもの車椅子を届ける活動、それを可能にする日本国内での収集、整備、活動資金確保を継続されてきた当会の主要メンバー、ボランティア参画されている方々へ心から敬意を表するとともに、私自身が今後どのように参加し、当会活動の一助になりうるか、今回の体験を受けとめながら活動していきたいと思いました。

以下、写真をまじえ今回の活動を報告いたします。

5月2日 スラカルタ市CITY HALLでの引き渡しセレモニー



感謝のスピーチを述べる Rudyatmo 市長は途中でスタッフに工具を持ってくるよう指示。自らその場でステップの高さ調整を行い、その後、参加者にも自らできることは積極的にを行い、大事に安全に使おうと呼びかけてくれた。

左3番目では浮いていた子供の足が4番目写真の市長自らの作業後、最下段のようにステップ高さが脚に合っている。

新幹線導入で話題となった現インドネシア共和国ジョコ大統領はこのスラカルタの元市長。現市長は副市長として彼を支えたのち市長に選出された。中央政府、NGO幹部とも相互信頼を持っていると見受けた。

5月3日個別訪問 Boyalall 県、Grobogan 県 で5家庭訪問
2013年 YSC043, YSC010, 2016年 YSC006, YSC0015, YSC017 を確認



今回の全日程には Yasmin さん(CBR Network Malaysia, Presidennt), ファウジアさん(Malaysian Relief Agency, Senior Manager) 両氏が同行してくれた。お二人はセラピーの心得もあり、母国でも日本からの専門家を招聘し『動作法』を肢体不自由者の家族へ紹介、普及を行っているとのこと。各戸で家族、フィールドワーカー、ソーシャルワーカーに簡単な指導をやってくれ、みなさん真剣に聞き入っていた。

私自身は、CBR活動という概念、言葉を識ったのは最近のことであり、彼女らの話からCBRの名の下に世界会議、アジア会議などの交流が行われ、各国NGO活動の連携が深まっていることを知った。

5月4日 Karanganyar 県、Sragen 県、で4家庭訪問

2013年 YSC058, YSC117 2016年 YSC086, YSC054 を確認



2013年 YSC117 は一年にて壊れたとのこと。その一年は近所の子供たちと家前の石敷道で遊んだであろうことを思い、使用法注意のうえ代替車支給を現地NGOに依頼した。各戸でのセラピー簡易指導を続けた。マレー語とジャワ語は80%は通じるとのことが、母親、フィールドワーカーとの共同作業をみて理解できた。最下段は父親が製作した木製の各種固定椅子、立位支持台。職業軍人さんで知識、ヒントを得る機会があるようだ。各家庭では本当に笑顔で迎え入れてくれ、記念写真を求められることが多かった。ほっとできる一瞬だった。

5月5日 現地NGO事務所で打ち合わせ



現地 CBR-DTC Solo は肢体不自由者への支援を 30 名のフィールドワーカーを中心に総勢 46 名有給スタッフで活動している。創立メンバーのひとりママン氏は今後とも当会との関係維持を強く要望している。子ども用車椅子の存在が、支援を必要とする子ども達との繋がりを強くできるとも述べていた。NGOとして行政からの資金援助は受けず、欧州 c b m、カリタスなどから、活動費、事務所や移動具としてのバイクなどの資金提供を受けている。中部ジャワ州の 15 市県でのサービスネットを構築している。地区によってはソーシャルワーカーとも協力し効果的に活動中。近隣者の理解、協力も大きな支えと感じた。 今後の活動への意見交換を行い辞した。

以上